



見 順 集

新潮日本文学

32

新潮社



© Akiko Takama, Printed in Japan 1973

口絵写真撮影 平川嗣朗

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

定価 1200 円

高見順集 新潮日本文学 32

昭和四十八年九月十二日 発行
昭和五十二年十月十日 四刷

著者 高見順

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部・東京(03)二六六一五一一

編集部・東京(03)二六六一五四一一

振替東京 四一八〇八

印刷所 大日本印刷株式会社

製本 新宿加藤製本

本文用紙 三菱製紙株式会社

扉・見返・カバー用紙 特種製紙株

式会社 表紙クロス 日本クロス

工業株式会社 函用紙 日清紡績

株式会社 製函 文京紙器株式会社

目次

如何なる星の下に

5

この神のへど

119

*

起承転々

274

真相

288

片耳のたれた兎

307

解説
年譜

中村真一郎

315
326

高見順集

如何なる星の下に

如何なる星の下に生れけむ、われは世にも心よわき者なるかな。暗にこがるわが胸は、風にも雨にも心して、果敢なき思をこらすなり。花や探るべく、月や望むべし。わが思には形なきを奈何にすべき。恋か、あらず、望か、あらず……。

標
牛

第一回 心の楽屋

——アパートの三階の、私の怪しい仕事部屋の窓の向うに見える、盛り場の真上の空は、暗くどんよりと曇っていた。窓の近くに有り合わせの紐で引く張ってつるした裸の電燈の下に、私は窓に向けて、小さな仕事机を据えていたが、その机の前に、つくねんと何をしてもなく、莫迦みたいに坐っていた。出来るだけ胸をせばめ、出来るだけ息を殺そうと努めているみたいな恰好で両肘を机の上に置いて手を合わせ、その合掌した親指の先に突き出した顎を乗

せて、私は濁った空を眺めていた。空というより、空を睥睨（みづから）めていたと言った方がよろしいかもしれぬ。空には何も見えないのであったが、眼も亦何も見ていない如くであった。だが、するうち、異様なものが、——それは丁度滅多に掃除しない部屋をたまに掃除したりすると、黴菌（かび）みたいな形の、長い尻尾を生やした黒い埃（ぼろ）がフワフワとそこらに飛び立って驚くことがあるものだが、まるでそんなようなヘンなゴミみたいなものが、盛り場から休みなく立ち上る埃で曇っているように見える向うの空に飛んでいるのが眼にとまった。そのゴミは黴菌のようにごちゃごちゃと集団を成していたが、見ているうちに細長く延びてへの字を描いた。雁であつた。——空飛ぶ雁をゴミのようだったと私が言うのを、読者は或は私の下手な作り話、大袈裟（おかし）な言い方と笑いはせぬかと、私は恐れる。そうした誤解を解く為には、私が見た実際の光景を読者に見て貰うより恐らく他に手がなく、そしてそんなことは願っても不可能なことであるのはなんとも口惜しいことだ。実際に見ないと、ゴミのようだったその異様さは分つて貰えぬほど、雁は実に飛んでもない、全くあき果てた高いところにいたのである。雁の飛行は、いつもそうしたもののなか。——私はその前に嘗（か）つて雁の飛んでいるところを見たことがあるかどうか、或は絵でしか見たことがないのではないか、そのところかはつきりしない。だから、雁がそんなに物凄く高いところをいつも飛ぶものかどうか、私には分らない。だから、――

——私はそうして浅草の盛り場の近くの部屋から偶然見た雁の姿に、ほう雁だというのと、なんてまあ魂消たところにといつた二重の強い印象を与えられた。何か今は忘れた、——今は私のところから去って行った昔の懐しい夢のようなものに、ふと邂逅することが出来たみたいな、胸のキューツとなる想いであつた。——夢が遠くの空を飛んで行く。手のとどかない、捉えられない高さ。夢は、すげなく見る見る去って行く。

私は机の上に乗りに出して、雁の飛び去るのを眼で追つた。しまいに私は机から離れて、窓辺に立つた。雁は隅田川の上流の方へ飛んで行った。ながいこと、私は窓際に突き立っていた。

——秋も、はや終ろうとしている。

この浅草のアパートに六畳間十二円のこの部屋を借りたのは、春が終ろうとする頃であつた。小さな机に座蒲団一つ、寝る蒲団が上下、洗面器一箇、それからあとはトランクのなかにおさまるインキとか灰皿とかコップとか手拭とか茶筒とか、——こんな工合に一々書き立てても造作のない、それだけの荷物を、人間の乗る自動車に詰め込んで大森の家からここへ運んできたのだが、夏に向う時分だったから、寒い季節に備えるものは持ってきてなかった。ところが、——雁が遙か向うに去って、蚤のように小さく成つた頃（それまで私はずっと見つづけていたが）宛かも雁が黄昏（きぐら）の先触れでもあるかのように、急に空から黄昏が降

りてき、黄昏は急に身に沁む寒さを一緒に連れて来た。

私は窓を閉めて机の前に帰った。両手を懷に入れて身を縮めた。寒い。低んとうはそんなに寒くなかったのかもしれないが、防寒の備えの無いことが神経的に寒さと呼んだのであらう。無いものへは欲しいと思う心が一層募るものである。

——私はひどく惨めな気持で坐っていた。誰に命令されてそうしている訳でもない。自分でそうしているのだ。即ち別にそうして坐っていないくはない訳はないのだが、私はじつと坐っていた。そして、

「——なんで俺はこんな怪しい部屋にひとりポツンと坐っていないくはないのだ」

と返事の出来ない問いを自分に投げかけていた。そこは仕事部屋に借りたものだ。だから私は仕事をする為に、そこに坐っている理窟である。だが、一向に仕事に手がつかず、そして、そうしてじつと坐って待っていたところで私の心が仕事へと立ち向うべく奮起する見込は先ず無いと自分でも諦めていた。だったら外へ出たら、よかりそうなものだ。大体私が盛り場の近くに部屋を借りたのは、放つて置くとぼやっとしている自分を、めまぐるしい雑沓のなかへ突き込み、神経に刺激を与えて仕事へと追いやろうという策略からであり、又それがいつか習慣に成っていたからである。——従つて本来なら、仕事が出来そうもないと坐り込んでないで、出来そうもないなら出来そうに成るように

盛り場の方へ出て行く可き所である。それが、私は出来なかつたのである。盛り場へ行っても、仕事が出来るような心のコンディションを得られそうもない。それどころか、心がちぎれに乱れ、精神がしどろもどろに成ってしまうことが、ちゃんと分つていたからだ。

少し誇張して言えば、私は外へ出て無駄だという以上に出るのが何か恐かつた。といつて、部屋にとどまつていても、そのうち精神が統一されようと思われぬ。かくて部屋にいても、外へ出て、どっちも駄目なら、いつそ家へ帰るのがいい訳だ。うすら寒い部屋に惨めな気持ちで入り込んでゐる位なら、家へ帰った方がいい。家だったらアパートと違つて火が欲しいと言えば、すぐ用意されるし、心も暖められるというものだ。ところがそれが又帰れなかつた。彼女のいる浅草に矢張りにとどまつていたかつた。

彼女というのは、小柳雅子というレヴィウの踊り子。十七。……

「——いいなアというのは、どういふの。踊りが巧いという意味か。それともその子がいという意味か……」

私は「小柳雅子はいいなア」と言つて、レヴィウ・ファンの友人からそう問われたことがあつた。

「——なんて言うか、うーん」と私は口ごもつた。

又ある時、友人のレヴィウ作者に、

「あんな子供を、——君」と言われた。「あんな子供、しやうがないじゃないか」

「しやうがないッて」

「てんで子供だぜ、何んにも知らないまだ子供だぜ」

咎めるように言うのに、私は「いや……」と遮り、羞恥

で真赤に成りながら「いや僕は、な、なにも……」と吃つて言つた。私は、——左様の小柳雅子に関する話は、い

ずれ彼女が可憐な姿をこの物語に現わすのであるから、その登場の際にゆつくり語るとして、今はアパートの部屋につくねんと坐つてゐる私の憐れむ可き姿に話を戻そう。ただちよつと言ひ足して置くなら、——先に私は外へ出るのが何か恐れ感じだつたと言つたが、それは、たとえ、どこそこへ自分はこれからメシを食ひに行くのだと自分に言いきかし得る、ちゃんとした外出の目的がある場合は別だが、そうでなく何の目的もなくブラリと散歩に出たりすると、きまつて彼女の踊つてゐるレヴィウ劇場に何か眼に見えない、そして全く抵抗できない糸で引き寄せられるようにして、足が向いてしまふからである。あれよあれよと言つてゐるうちに、私はレヴィウ劇場の前に立つてゐる夢遊病患者みたいな自分を見出さねばならない。そして、たとえ、蛇が自分の前にヒョロヒョロと立ち現われた愚かな蛙を造作なく呑み込んでしまふ要領で、劇場は愚かな私をあつさり呑み込んでしまふ。……

雁がわたるのを見ての聯想からか、私は前の日、浅草へ遊びに来た画家の友人から聞いた、ある外国人の話の思ひ出した。その人は相当著名な詩人だそうだが、数年前に国

を離れ、詩も捨てて、当てのない旅に出、日本へも来たのであった。「僕の友人がその通訳に成って、——それで、

こんな話を僕にしてくれたのだが」と画家の友人は言った。箱根へ案内した時のことだという。その外国人と通訳とが散歩に出た。人気のない寂しい道を歩きながらのつれづれに「あなたはどのような目的で旅行しているのだ」と通訳が質問した。外国人はなんにも答えない。詩囊を豊かにするための遍歴かというような意味のことを尋ねると「——否」という、はっきりした返事。では単なる興味からの世界漫遊かと聞くと、また「——否」とはっきり言う。

「——では、何ですか」
「分らない」

自分でも、何故追われるように、海から海を渡って知らない国を旅するのか、分らない。然しそうして心に「何か」を求めていることだけは分るが、その「何か」が何んであるか分らない。いわばその分らない「何か」を自分に分らせる為に放浪しているようなものだ。碧眼の詩人は案外落ち着いた声でそう言った。

二人はそれから黙りこくったまま歩いていった。外国人の顔は激しい喧嘩のあとのように白っちゃけ、赤いむらむらが皮膚の下に沈んでいた。

突然、横合いの道から、若い男女の華やかな笑い声が聞えてきた。青春の喜びをただもう謳歌しているような、明るい大胆な輝いた声に、外国人は頬に石でも投げつけられ

たような表情を見せたが、そうした顔の前に、颯爽と腕を組んだ若い男女が、——男は二十三の艶々しい皮膚をした、外国人に負けない背のすらりと高い、肩はばも広い運動選手風の大学生で、女は十八九のこれも体格のいい、新鮮なビチビチした肢体で、——その二人が悪びれず、溢れるような若い生命の息吹きを吹きつけながら近寄ってきた。そして呆然と立った外国人の前で、くるりと背を見せて何やら又楽しげに笑い興じながら、麗らかな陽のさんさんと降りそそぐ道を歩んで行った。漂泊の詩人は、深い感動と哀傷に打たれた風で、じっとそれを見送っていた。通訳が何か話しかけようとした。すると詩人は顔を隠すようにして、素速く踵を返し、何も言わずさつと来た道を駆け戻って行った。——倒れるように駆け出していった。

通訳が後を追ってホテルに帰ってみると、その人はベッドに打ち臥して、気が狂ったのかとおもわれるような号泣のうちに激しく身悶えていたという。

「その人は年寄りなの？」

話の中途に私は口を挟んだ。問わずにいられたかったのである。

「いいや、まだ若いんだ。——僕等と同じ齡恰好らしい。三十三四というところ……」

画家の友人は沈んだ声でそう言って、私の眼を覗き込むようにした。私は、何か心がカラカラに乾き飢えていて、虚ろな腑抜けのようなぼんやりした状態ながら、同時に激し

く何かを喘ぎ求めて心がヒリヒリしているこの日頃の、どうにも始末のつかない自分の有様をその友人に訴えたところ、——友人に、というよりそうして自分自身に言っていた感じだが、画家の友人がそんな外国人の話を私にしたのだ。「僕等と同じ齡なのか。ふーん」と私は頷いた。

しばらく沈黙があつたのち、友人はつづけた。「——その外人は発作のような号泣がおさまると、直ちにホテルを引きあげて東京へ帰り、そしてすぐ日本を去った。フランスへ行つたのだが、その外人は金持で、——通訳を勤めた友人と一緒に連れて行つた」

「齡は同じでも金持というところが、僕等と違ふね」
私はいわば自分から呼んで置きながら重苦しい空氣に耐えられないで、それを払いのけるようにそう言つた。

「——ところでそこにまた面白い話があるんだ。友人がフランスへ行くように成つたに就いては……」

それには、こういう話があるという。箱根のホテルを引きあげる時、通訳が宿料を払うと、その一部を番頭がこっそり彼の手に戻した。なんだと聞くと、外人の觀光客を連れてきてくれた謝礼だと言う。いらないうつと、そのホテルではガイドにコミッションを割り戻す慣わしに成つていふと言う。「では、それだけ宿料が高く成つてゐる訳だね。じゃ俺はコミッションなんかいらなから、それだけ宿料をまけて貰うことにしよう。ピルを書き換えてくれ」そう言ふと、そんな工合にはいかなうと言ふ。いかなう訳

はないじゃないか。——そんな押し問答をしている所へ、外人が現われて、なにを争つてゐるのだと言ふ。受け取らないと言つてテーブルの上に投げ出してあつた金が、既に外人の眼にとまつてゐるので、仕方が無いから通訳はそのまま事情を語つた。聞いて外人は黙つてその場を去つたが、あとで通訳に、お前の望みをなんでもいいから遠慮なく言つてみる。自分が出来ることなら望みを適えてあげようと言つた。「まるでお伽噺に出てくる神様みたいなことを言つたんだね」と画家の友人は私に言うのだった。「友人は一風變つた男で、——神様が言うようなことを人間が言うのに、なにをといったムツとした氣持に成つたという。そこで、あなたはすぐ日本を去るというが、何処へ行くのかと聞いた。分らないという返事に、フランスへ行かないかと言つた。どうして、と外人が聞いた。——フランスへ行くようだったら、自分を一緒に連れて行つて欲しい。望みというのは、それだ。——駄目だろうと、半分思ひながらつまりムツとした氣持から難題を吹き掛けるようなつもりでそう言つたそうだが、半分は本氣で、画の勉強に巴里へ行きたがつてゐたんだ。——ところが、宜しいという訳さ。自分でもこれで行き先が決して嬉しいと外人はほんとうに嬉しそうに握手を求めたそうだ」

私はそうした話を聞いて、その外人の、巴里に行こうと思ふ人まで一緒に連れてすぐ行ける、その富裕な身分に羨望と嫉妬と反感を覚え、——（それは私のうちに苦痛を

呼んでいた。)

「面白い話には違いないが、ちょっと嫌だね」と言つた。前の、若い男女を見て泣いたという話が私に与えた純粹な切々たる哀しさが、その為薄らぐようであつた。だが話し手としては、秋風落莫たるところへ明るい光を差させる効果を狙つて、そうした話を加えたようであつた。

——気がつく、部屋の中は真暗だつた。私は物倦げに立ち上つて、部屋の外の、扉の横にあるスイッチを、半開きにした扉から手をのばして、パチリとひねつた。

机の前に戻ろうとして、ふと私は部屋の隅に赤く錆びた瓦斯焔炉があるのに眼をとめた。部屋で自炊が出来るように瓦斯が引いてあるのだ。私は、そうだ、こいつは火鉢の代用になるぞと思つた。今までそれに気がつかなかった自分の迂闊さを笑いながら、工合をためすべく、早速火をつけた。ポツと景氣のいい音を立てて燃え上つた青い焔の上に、しめしめと手をやると、勿論いい加減離れた上へやつたのだが、——熱い。そこで脇から手を翳すようにしたが、そもそも瓦斯焔炉はそういう仕掛になっているのだから、脇へはウソみたいに熱を放射しないのである。熱を受けるには、矢張りまっすぐ焔の上に手を置かなくてはならない。それがまた随分上でも熱いのだつた。そして手を上下させてしらべて見ると、熱いところから急に熱くない冷たいところへと急變的に移り、その間に、丁度いい工合だと思われるような、暖かいという部分を持つてなかつた。私は、

あまり頼みにならない代用品だと落胆しながら、それでも手をぎゅめに裏返しては、あぶつてみると、そのうち自分の瘦せ細つた骨と皮だけのような手が、なんだか火に焼かれている鰯の足かなんかみたいに哀れ深く見えて来て、いやな氣持に成つた。

私は火鉢の火が恋しく成つた。「——そうだ。お好み焼屋へ行こう」

本願寺の裏手の、軒並芸人の家だらけの田島町の一区劃のなかに、私の行きつけのお好み焼屋がある。六区とは反対の方向であるそこへ、私は出掛けて行つた。

そこは「お好み横町」と言われていた。角にレヴィウ役者の家があるその路地の入口は、人ひとりがやつと通れる細さで、その路地のなかに、普通のしもたやがお好み焼屋をやっているのが、三軒向い合つていた。その一軒の、森家惣太郎という漫才屋の細君が、御亭主が出征したあとで開いたお好み焼屋が、私の行きつけの家であつた。惣太郎という芸名をそのまま屋号にして「風流お好み焼——惣太郎」と書いてある玄關の硝子戸を開くと、狭い三和土にさまさまのあまり上等でない下駄が足の踏み立て場のない位につまつていた。

「こりや大変な客じゃわい」

辟易していると、なから、「——どうぞ」と細君が言い、その声と一緒に、ヘットの臭いと、ソースの焦げついた臭い、そういったお好み焼屋特有の臭いを孕んだ暖かい

空気が、何やら騒然とした、客の混雑というのとはちよつと違つた気配をも運んで、私の鼻さきに流れて来た。——玄関脇の三疊間に、三つになる細君の子供が、昼寝のつづきか、奥の、といつても二間しかないが、奥の六疊間の騒ぎに一向平気で、いと安らかに眠っていた。

扱てここで、芝居にたとえるなら、いわば初めて物語の幕は開かれるのである。では、今までのおしやべりはなんであつたか。私というこの物語の語り手の心の楽屋をちよつと覗いて見たのであるが、思えば、そんなことは不必要であつたかもしれない。

第二回 風流お好み焼

たとえば学校の小使部屋などによくある大きな火鉢、——特に小使部屋などというのは、余り上等でない火鉢を想像して貰いたいからであるが、その上に大きな真黒なテカテカ光つた鉄板を載せたの周りを、いづれも一目見てこれもあり上等な芸人でないと知れる男女が、もつとも女はその場に一人しかいなかったが、ぐるりと眼白押しに取り巻いて、めいめい勝手にお好み焼を焼いていた。大体その「風流お好み焼——惣太郎」の家に出入りする客は、惣太郎が公園の寄席の芸人である関係から、芸人が多く、そしていつも定つた顔触れの、それも余り多数ではない常連

ばかりだったから、私は一廻り顔を見知っていたが、その日の客は初めて見る顔ばかりであつた。何か惨めな生活の垢といつたものを沁み込ませたような嫌な、しなびた、生気のない顔ばかりで、まるでヘットそのものを食うみたいな、豚の油でギロギロのお好み焼を食っていないが、てんで油気の無い顔が揃っていた。そしてその顔の下に、へいどぎつい浅間しい色彩の、いかにも棚曝しの安物らしいヘラヘラのネクタイやワイシャツを付けていて、それらは、それらの持主の間までを棚曝しの浅間しい安物のように見えるのに見事に役立つのであつた。——左様、こうした私の書き振りは、その人々を見た時の私の眼に蔑みと反感が浮んでいたかのように、読者に伝えるかもしれないが、事實は正に反対なのである。私の眼には、——その人々を見ると忽ち私のうちに湧き上つてきた、なんとも言えない親愛の情、なごやかな心の休、それらの齎らした感動がありありと光っていたに違ひないのである。

その感動に背後から衝かれるようにして、私は、火鉢の前にとでも割り込めないと分つていながら、部屋に上つて行つた。すると、火鉢をギッシリ取り巻いたその怪しい一団の一人の、女持ちみたいな人絹のマブラを首に巻いた、脾弱そうな身体つきをした、ちよつと二枚目の顔をした若者が、私を上目越しに見て、

「——すみません」

と言つた。「すぐ空きますから、——すみません」

細い胸を縮めてお辞儀するその恰好は人のいい感じの慇懃^{けんけん}を通り越していかにも卑屈な哀しいものだったが、その声も哀しく卑屈だった。

「どうぞ、ごゆっくり」

私も、——こうすれば何かいたいいたい相手の心を傷つけないですむ、負けない卑屈になるだろうと努めた声でそう言い、又そのように努めた物腰で、部屋隅に坐った。

若者は減茶減茶にソースをぶっつけた「牛でん」をおかずにして、メシを食っていた。血みたいに生々しく赤いその薄い唇は、私の眼にそれが何やら年若い彼を蝕^{くは}んでいる薄倖^{はくしやう}の暗示のように映り、胸に病いでも秘めているのではないかと、ふとそんなことを私に想像させるのだったが、そうした口のなかへ、若者はヤケに白い飯を押し込んでいた。ガツガツと食う形の癖に、不味^{まずい}そうな、食欲がないので、無理遣^{むりぢや}い食っているといった感じを一方で出していた。忽ち茶碗を空にすると、

「ミーちゃん。すんません」

台所にその声を掛けて、茶碗を頭上に掲げた。

ミーちゃんと呼ばれた、緑色の洋服をきた若い女が、指からんだ黄色い支那蕎麦^{そば}をうるさそうに取りながら、台所から早速飛んで来た。私は、このミーちゃんなる女性とは顔馴染^{かなじみ}であった。

私を見て、ピョコンと男のような乱暴さでお辞儀をする、と、

「——転手^{てんでて}古舞^{こまい}いだわ」

と、怒ったみたいに言った。

「大変だね」と私が言うのと、「すまないなア」と若者が、女のようなしなやかな細い手で茶碗を渡しながら、そう言うのと同時だった。するとミーちゃんが「そう、すまない、すまない、言うのよしなさいよ」と、姉のような調子で、きめつけた。

「——だって」

「嫌いだわ。男の癖に」

「——すみません」

今度はおどけて言ったが、おどけていてもその声は細い金属の線を思わせる、繊弱な、微かに震えを帯びた感じの声だった。

座のなかから「——とっても、いけねえや」という頓狂な、やや卑猥な調子を籠めた声が挙った。ミーちゃんとその若者との間に何かあるのだろうか、どうやらその何かを野次っているらしいことが事情を知らない私にも、その声から察せられた。だがミーちゃんは、ちっとも動じないケロリとした顔で、ここの細君が小皿をチャチャラいわせて、注文のお好み焼の材料を忙しそうに盛り分けている台所へ去って行った。若者は照れ隠しのように、

「もう焼けるね」

と、側の女優風の女が焼いている支那蕎麦を指さした。「妬^やけるですよ」と、すかさず誰かが言った。

ここでミーちゃんのことを、ちよつと。私は初めてこのお好み焼屋へ来て、ミーちゃんに会った時、彼女がお客のようでありながら、この場合のように何くれとなく小まめに手伝っているのを見て、この娘はなんだろうと思つた。ここへ私を案内してくれたレヴィウ作者に、そこでそつと聞いてみると、彼女は嶺美佐子といつて、以前下座のダンシング・チームにいて、その後〇館に移つた踊り子で、今は公園の舞台に出ていないという。——それ以上のことは、彼は知らなかった。

浅草の舞台は大変な労働で、その舞台をやめると、踊り子は急に肥る。身体を締めつけていた箱を外した途端に、ぶうと膨れたといったような、その奇妙な肥り方を美佐子も示していて、まだ若いのだろうに、年増の贅肉のような、ちよつといやらしいのを、眼に見えるところではたとえは顎のあたりに、眼に見えなくてもはつきり分るところでは腰のあたりに、ぶよぶよと附けているのに、私は「なるほどねえ」といつた眼を注いだ。——蜂にでも螫されたみたいな腫れぼつたい眼蓋で、笑うと眼がなくなり、鼻は団子鼻というのに近く、下唇がむつと出ているその顔は、現在のむくみのようなものに襲われない以前でも、そう魅力的な顔だったとは思えない。ただ声が、——さて、なんと形容したらいいだろう、左様、山葵のきいたのを口にふくむと鼻の裏側をキュッとくすぐられる、あの一種の快さ、あれにちよつと似た不思議な爽快感を与える声で、少くとも

私には少なからず魅力的であつた。

その後、私はそのお好み焼屋の、これ亦なんというか、——何か落魄的な雰囲気、惹かれて足繁く通うようになったが、行くたびに、ミーちゃんこと美佐子は大抵いた。そしていつも、お客のようでありながら、お客にしては気のききすぎる手伝いをしていた。——この、三十をちよつと出た年恰好の、背のすらりとした、小意気な細君を美佐子は「お姉さん」と甘えるように言っていた。(この「お姉さん」というのは、ねに強いアクセントを置き、さんは「さん」と「すん」の間の音で、言葉では現わし得ない微妙な甘さである。美佐子は、黙つて放つて置くと、いかにも気の強そうな、男を男とおもわぬ風の女としか見えない、——たとえば墨汁をたづぶりつけた大きな筆で勇ましく書いた肉太の「女」というような字を思わせる、圧迫的な印象をやや強烈に撒いているのだが、時々、そうした甘い言葉のうちに、おや? と吃驚させる優しさを放射した。)

——この細君は美佐子を「ミーちゃん」と妹のように、(或は愛する猫に向つてのように)呼んでいた。

レヴィウの幼い踊り子たちは、親しい男性を呼ぶ時、いかにも人なつこい調子で「お兄さん」と言う。私は美佐子が「お姉さん」と言うのを聞かたびに、心をふるわすその甘さを、そつと捉えて、

「お兄さん」という言葉を、それに当てはめた。私は眼をつぶつて、秘かに、その甘い調子になぞらえて、

「——お兄さん」

と口の中で呟くこともあった。心のなかで、私は憧れの踊り子の美しい甘い顔、美しい甘い姿態を思い描いていた。ああ、憧れの彼女が、——あのいとしい小柳雅子が私に向って「お兄さん」と言ってくれるのは、いつの日か。私はその日のくるのを、どんなに待ち望んでいたことだろう。だが同時に、そうした日のくることが何か恐い感じでもあった。何故かそうした日の来ないことを願ってもいた。……

話は美佐子に戻って、——はてさて、恋心持の話から食いものの話に突然移るのは妙な工合であるが、——「ビフテキ」、お好み焼の「ビフテキ」である。その「ビフテキ」というような、ただ油をひいて焼くだけでなく、焼きながらその上に順次、蜜、酒、胡椒、味の素、ソースの類いを巧みに注ぎかけねばならぬところの、ちよつと複雑な操作を必要とするものは、私は美佐子に調理を頼んだ。「ひとつ、願いましうかな」というような言葉で頼むのだが、それは、焼き方が難しいから未熟な私の手に若干負えないせいもあるけど、美佐子が側で何か手ぐすねをひいて、まかされるのを狙っている風だったからもある。そうした、明らかに感ぜられる希望、——というより欲望を無視して、自分で酒蛙酒蛙と焼くというようなことは、ちよつと出来難い私の性分である。だが知らるる通り、お好み焼の面白さというのは、自分の手で焼くところにあつて、食うだけでは、面白さ楽しさの殆んど大半が失われると言つて

いい。私はそれを忍んで、美佐子にまかせる。それは美佐子にも通じるにちがいないから、そのことは何やら美佐子の甘心を買うごとき形に成るのである。私は自分のうちに、美佐子の甘心を買わねばならぬ必要を、どこにも見出すことができなかったが、——そうした、それは、前述のような私の性分からもあるが、美佐子が調理を狙っているのは、そうしてお好み焼の大半の楽しみを楽しまたいとか、又は調理の妙技を示したいとかいった浮いた気持からだけではないように私には窺えたからである。男のために、おいしい料理を作つて食べさせてやりたい。そういった心の奥にひめられた家庭生活への憧れ、男につくすことへの女らしい渴き、そうした哀しさが私に窺えたからであつた。——もしかすると、私の窺つたそうした哀しさを、美佐子自身は気付いてないかも知れなかつた。美佐子は、表面では、難しいから代つて焼いてあげましようといった顔をしていたが、勝気な彼女のことだから自分でも或はそのつもりでいるのかもしれなかつた。

そんなような場合の、あるとき、私はさりげない調子で、「あんたは、どうして舞台をやめたの」

と尋ねた。火鉢の前には、美佐子と私だけしかいなかった。珍しく客のない静かな晩だった。いつもなら、火鉢のまわりにウロウロしていて、客の誰彼にかまわず纏りつく小さな子供も珍しくないなかつた。

「——つまんないから」